

2020年 7月26日礼拝式次第

日本基督教団半田教会
横山良樹牧師

招詞 : テモテへの手紙 1 1 : 15

「キリスト・イエスは、罪びとを救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしはその罪びとの中で最たる者です。

讚美歌 21-17番（聖なる主の美しさと）より1番のみ

聖なる主の美しさと その栄を仰いで
まごころもて 御前に立ち 御名をたたえ あがめよう

詩篇交読 121篇

祈 禱

わたしたちの救い主、主イエス・キリストの父なる神さま。新しい朝を迎えました。通常ならば子供たちは夏休みを迎えている時期ですが、今年はまだ梅雨による豪雨が続き、さらに新型コロナウイルスがふたたび各地で猛威を振るい、緊張と不安の中に日々の歩みを続けております。国々の歩みも、互いに背を向け、内側に閉じこもりがちでニュースを多く目にする昨今です。主よ、どうかわたしたちを憐れんでください。命の事柄を人間の手の内にあることとして生きようとし、その重さに耐えきれずに傲慢にふるまったり、また目をそらして刹那的にふるまったりすることからわたしたちを解放してください。創造主であるあなたのみ旨を知り、キリスト・イエスのお言葉と御生涯に示されたあなたの愛のうちに、わたしと、わたしたちを位置づけ、信仰による落ち着きと愛によるやわらぎをもって平安に生きることを得させてください。御言葉をください。御言葉の中にある命に、主よ、どうか触れさせてください。聖霊をゆたかに下して、この場をおさめ、あなたの御心になるように導いて下さい。今日は、聖餐式もございます。どうか、ひとりひとりが主のご臨在を確信することを通して、あなたの証人として働くことを得させてください。豪雨の被災地で打ちひしがれている人々に、わたしたち

が心を寄せ、分かち合いに生きることができるよう、あなたが導てください。今日、あなたの御言葉が語られる世界の教会において、新しい出来事を起こしてください。人間の思いが砕かれ、低くされて、あなたと共に歩む幸いをお与えください。わたしたちのささげる礼拝をはじめから終わりまで、すべて守り、わたしたちをひとつの霊によって結び、主の民として力づけ、歩ませてください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

聖書朗読 : テサロニケの信徒への手紙 4章 13~18節

兄弟たち、すでに眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいて欲しい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出して下さいます。

主の言葉にもとづいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちがが、眠りについた人たちよりも先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主ご自身が天から降ってこられます。すると、キリストに結ばれて死んだ人々が、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります。ですから、今言った言葉によって励ましあいなさい。

讃美歌 : 21-202番「よろこびとさかえに満つ」(1番)

よろこびと さかえに満つ
主の日こそ われらの憩い
つかれをも いやす神に
わが重荷 すべて委ねん

説教： 「引き上げられる」

わたしは金城学院高校に、週一度聖書を教えに行っています。もうずいぶん前のことになりますが、授業をおえて教室を出たところで生徒に呼び止められて、先生、生きる意味を一言でいうと何でしょうか、ときかれたことがあります。その問いかけは、わたしの授業の内容を受けてのものでありましたが、とくに青年期の課題とといいますか、これからどのように生きてらよいか、自分は何者なのかということを進路や、職業の関連で選択をしなければならない世代にとって必要な問いかけでした。高校二年ですので16~17歳、これからの時間をたくさん持っている、可能性としての未来をたくさん持っていて選び取っていかなければならない、そういう世代の課題をもつわけです。反対に、半田教会の教会員平均年齢は67歳ですから、彼らに比べれば時間としての未来はわたしも含めて客観的に少ないでしょう。その代わり経験としての過去をたくさん持っている。そうすると世代の課題としては、これから先のことに関しては、これまで生きてきた関わりを整理しつつ、死への準備、その後のことを考えるのも自然のことわりではないかと思えます。本当は、死は、いずれの世代にも訪れるものですから、誰もが考えなければならない課題なのですが、若い時にはなかなか捉えにくいものです。ただ生きる意味を問うことは、じつは死を考えることにもつながっています。死んだらどうなるかは将来のことを問うているわけですが、それは今日のわたしの生き方、生きざまの先にあることだからです。今日までの積み重ねを飛び越して死がくるのではありません。その意味で、パウロがここまでテサロニケの信徒たちの、主にあつての生き方を褒めたたえ、さらに信仰と愛に立つ生き方に務めてくださいと励ましているのは理に適ったことだと言わなければなりません。今日、主イエスに結ばれて愛と信仰に生きていれば、明日召されたとしても何の心配もないとパウロは考えているのです。

テサロニケの信徒への手紙の4章18節から5章11節までは、これからくる終末、平たく言えば世の終わりというキリスト教の枠組みにふれる個所で、この手紙の内容上の中心、テサロニケの人々がパウロに聴きたいと思っていた彼らの関心ごとでした。ここでパウロは、信徒たちに眠っている人たちについては無知でいてほしくない。希望を持たない他の人のように嘆き悲しまないために、と語り、どのような希望がキリスト・イエスにおいてわたしたちに与えられたかを思い起こさせようとしています。これは聖書全体のメッセージから常に確認する必要のある大事です。キリストはわたしたちのた

めに十字架で死なれました。死は誰にも訪れる厳粛な事実です。その死は人となられた神の子キリスト・イエスの場合、はりつけの死というもっとも惨めで残酷なカタチ、さらしものとして与えられました。わたしたちの信仰の理解では、その刑罰としての死こそ、神の判決。わたしが犯してきた罪の大きさ、重さ、背きに対する神の怒りであり、この十字架の刑罰によって、主イエスがわたしに代わってわたしたちの罪を処理されたことを証するものです。この結果、創造主に背いた神の怒りとして訪れる暗黒の死、こういう言い方をしますのは最初に神に背いたアダムとその妻は神の戒めを破り、神の呼びかけに背いて園の木の間に隠れた。それは創造の秩序に背を向けたことであり、光の反対は闇、命の反対は死、秩序の反対は混沌に逆戻りすることに他ならなかった。死を、個人が引き受けようとして引き受けきれないのはこの混沌に飲み込まれるからで、闇のなかにしずみ、刑罰として臨む死、みずから引き起こしてきたさまざまに償うことの出来ない事柄を良心が責め立てる。わたしたちがもはや担うことも、処理することも出来ない背きの事実は、漠然とした不安と恐れと虚無となって、わたしたちを蛇に睨まれた蛙のように身動き取れなくしてしまふ。しかし、聖書の告げる福音は、死はキリストの復活によって打ち破られた。死はキリスト・イエスにおいて示された神の愛によって敗北している。これこそがパウロが、この福音をたずさえて全世界を歩き廻ろうとした動機であります。死が敗北したというニュース、キリスト・イエスが、わたしの罪の問題を解決してくださった。死はキリストの命に飲み込まれたという消息が、死の棘を砕き、この神の判決を受け入れ、キリスト・イエスに結び付けられる洗礼を受けた者は、主イエスに結ばれた者とされている。ゆえに 14 節で「イエスが死んで復活されたとわたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出して下さいます」とパウロは語る事ができたのです。ここで「信じて眠りについた」とパウロは死を表現しました。死は眠りに変えられている。だから起き上がることができる。キリストが死から復活させられたように、神の定められた時に起き上がる。死は、キリスト・イエスの十字架と復活の御業を信じることの許された者たちには眠りに変えられている。ここに希望があります。パウロはここで希望を取り扱っているのです。希望の根拠を確認させ、いまを生きる力、不安に打ち勝つ慰めを与えようとしている。つづく 15 節以下に語られることは、キリストの再臨と呼ばれる出来事です。これは個人の死と復活を越えて、古い時代の終わり新しい時代の始まりを告げる出来事として聖書で語られてきました。死者の

復活についての教会の教えについては個人レベルで理解ができて、再臨については世の終わり、終末と完成についての出来事ですから、これはなかなか理解が難しいですね。ここでの表現で注目したいのが「引き上げられる」という言葉です。これも旧約聖書の救いの文脈においてはゆたかな例のある言葉です。例をあげますと、死者の国エジプトでファラオの奴隷として430年ものあいだ苦しめられていたイスラエルを導き出したモーセ、彼の名前は、王女が川から彼を引き上げた（マーシャー）したから「モーセ」と名付けたことが出エジプト記に記されています。やがてモーセはエジプトで奴隷とされていた人々を「引き上げて」連れ出し、神の民イスラエルへと生まれ変わる新しい時代の指導者となりました。また列王記のエリヤの嵐の中を火の戦車と騎兵によって連れ去られる昇天も、死ではなく、神によって引き上げられ取り去られるイメージが重ねあわされています。そして、エリヤは主の再臨の使者として信仰の対象となってゆきます。このように、パウロはここで救いの歴史にもとづく象徴的な表現を用いています。まるでイエスさまが譬え話で天国を説明されたように旧約以来のイスラエルと神の民の伝統を用いて説明しています。天使のラッパの号令は、エリコの城壁が崩れ落ちる際を思い起こさせます。まるで幕が切って落とされるように、新しい世界が一瞬に訪れるイメージを豊かに描き出します、こうした神話的な比喩を現代のわたしたちがそのまま受け止めることは難しいかもしれません。正直、わたしもこういう箇所をどう読み、解釈したらよいのか、この1週間、色々と調べてみましたがこれから起こると神が約束されたことを人間のレベルから読み解くのは基本的に出来ないと思われました。ただこの神話的なイメージを用いて、パウロが強調していることはふたつあります。ひとつは、モーセのくだりでお話ししたように、わたしたちは引き上げられて救われるということ、もうひとつは先に召された者といま生きているわたしたちは再び出会い、主に迎えられて結び合わされ、決してもう離されることはないというメッセージです。死の本質は応答が失われることですが、死はキリストの命のうちに飲み込まれ、キリストの再臨の時に主に愛された者たちは再び結び合わされて新しいステージに進むことになる。そこでは死がこの世における別れの越えがたい壁となったような出来事は起こらない。主の愛は罪による障害も、死の支配からも、わたしたちを贖い、新しい存在とする。引き上げられ、主に結ばれた兄弟姉妹は永遠であることをパウロはテサロニケの信徒たちに教え、そのことによって互いに励ましあうように勧めています。これは創造主である神の新しい創造の御業であり、わたしたちがそこで新たにされ

る希望を含んでいます。「引き上げられる」という表現はまさにそのことに触れているのであり、わたしたちが昇ってゆくものではありません。わたしにはその力も資格もありません。芥川龍之介の蜘蛛の糸という短編小説では地獄に落ちて苦しむカンダタにお釈迦様が蜘蛛の糸を垂らす。生前、一片の憐みを見せたことを思い慈悲を垂れる。その細い救いの糸をカンダタは上り始める。必死に上って行って、ふと気づくと自分以外の亡者たちも懸命に地獄から這い上がろうと蜘蛛の糸をよじ上ってくる。これでは切れると思い、お前から来るなど叫ぶと蜘蛛の糸は切れてしまう。これはこれで人間の心の狭さ、自己中心性のもつ滅びを見事に描き出している作品ですが、自力救済なんです。自分の力でよじ登っていくのではない。わたしたちは神の憐みによって、黄泉にまで降りてくださったキリストを引き上げられた神の全能の御力によって引き上げて頂くのです。キリストの迎えによってそのようにして頂く。ここに神の憐みによって救われる聖書の変わることのない救いの道筋がパウロによって継承されていることがわかります。そして、わたしたちは再臨の時に、先に召された者たちとも空中で、ドラマチックな表現ですが、引き揚げられてこの世界ではない、地続きではないところで出会うことになる。その喜びが約束されている。だからうつむいてはならない。死を前にして自らのうちを覗き込んで清算を始めてはならない。最後のことばをあなたに語られるのは救い主キリストです。あなたが決めることではない。あなたの罪は赦された。十字架の主と、主を陰府から引き揚げ、復活させられた神の愛に委ねなさい。そこにあなたがたを罪と死の奴隷として支配しようとするサタンの試みからの解放がある。救いがある。そしてそれは群れで聴くべき消息です。一人一人では死の力に負けてしまう。こうしてともに主を仰ぎ、わたしたちのために十字架にかかれ、復活された主をこうして日曜の朝ごとに祝うことで、わたしたちに約束された神の愛を分かち合って、わたしたちは喜ぶのであります。

お祈りいたします。

神さま、暗い夜の間も守られて、新しい朝、新しい命に生かしてくださり、感謝をいたします。暗い夜と言い表された不安があります。わたしたちの魂を縛り上げる心通わぬ現実や、将来の不安、衰えてゆく体があります。わたしたちは死を迎える存在ですが、あなたが、その独り子をお与えくださるほどに、この一瞬で飛び去ってゆくわたしたちを顧み、愛して下さったことを

感謝いたします。キリストに結び合わせて下さったあなたに信頼し、聖霊による導きを願い、それぞれの持ち場を歩ませてください。また礼拝の度ごとに、わたしたちをひとつとし、互いに仕えあい、愛し合うものとして、主の愛のうちにいる者とさせてください。どうか、わたしたちの愛する方々を、この群れに招いて下さい。この願いと感謝、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン

讚美歌 21-460 「やさしき道しるべの」(2番)

聖餐式

献金

報告

添付の週報をご覧ください

祈禱

主の御名が崇められるように。コロナウィルス感染症対策下で、医療・介護・福祉に従事する方たちのために、ともに礼拝をささげる日が与えられるように。豪雨の被災地のために。

主の祈り

天にまします我らの父よ
ねがわくば御名をあげさせたまえ
御国を来たらせたまえ
御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を 我らがゆるすごとく
我らの罪をも ゆるしたまえ
我らを試みにあわせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄とは 限りなく汝のものなればなり

アーメン

祝 禱

主イエス・キリストの恵みと、
父なる神の愛と
聖霊との親しき御交わりが
主の恵みのご支配を信じてこの世を生き抜く
あなたがた一同の上に、とこしえにあるように。

アーメン！